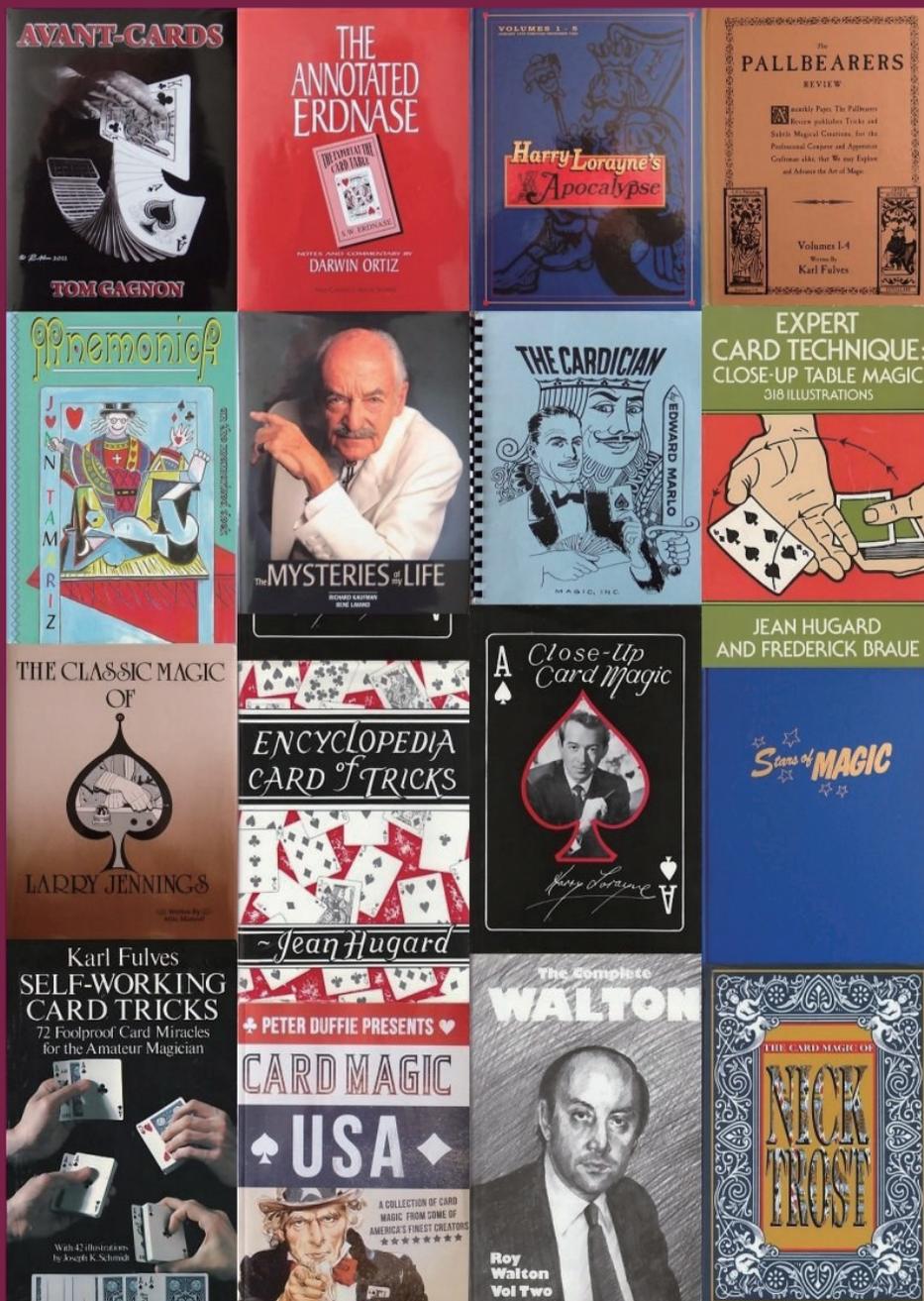


Card Magic Magazine



No. 7

November 4, 2012

by Hideo Kato

カードマジック徹底研究

フォロワーリーダー

Part 1 原点

‘フォロワーリーダー’が誕生した経緯を、フォーセットロスが雑誌“イビデム”1956年6月号に書いていますので、その文章を翻訳いたします。

読者の皆さんは、‘フォロワーリーダー’がどのように誕生したか、その歴史に興味があることでしょう。かの古き良き時代、1920代から1930年代にわたって、私はネルソン・ダウンスと非常に親しくしていて、よくアイオワ州マーシャルタウンのダウンスの家を訪れて、幸せな週末を過ごしたものでした。彼の屋根裏部屋には生活用品の他に、古いマジック道具や手紙や書籍がぎっしり詰まっていたいました。

1929年のある日、ウィーンのオトカー・フィッシャーからの古い手紙の束をめくっていたとき、フィッシャーの曰く、ウィーンのアマチュアマジシャンが考案したというマジックの説明を見つけました。それは‘フォロワーリーダー’でした。

‘フォロワーリーダー’という呼び名は、後日私がつけたものです。私はそのマジックをノートに記録し、数年後ダイ・バーノンに見せました。彼は興味を持ち、例によってすぐに彼の改良やタッチを加えました。そして1932年に発行された“ファイヴクローズアッププロブレムズ”にそのマジックののせることになったのです。

これと同じ時期、私は当時ウニペグにすんでいたトム・ボイヤーとも親しく交流しており、上記の情報を彼にも送りました。トムもバーノン同様にすぐに原案を改良しましたが、チャーリー・ミラーに言わせれば、現代においてもボイヤーの‘フォロワーリーダー’がベスト中のベストである、ということになります。

フォーセット・ロスは“イビデム”に以上のように書いたあと、トム・ボイヤーのバージョンを解説しています。

なお“カードカレッジ”第4巻でロベルト・ジョッビは、フォーセット・ロスが“イビデム”で言及した‘フォロワーリーダー’の原案者は、ドイツ人のラインハルト・ローンスタインであると指摘しています。

フォローザリーダー

= ダイ・バーノン、"ファイヴクロースアッププロブレムズ"、1932年 =

* 方法 *

このトリックに通常使われる赤と黒の10枚を重ね、表向きで広げて見せますが、閉じるときに下から3枚目のカードをダウンジョグします。全体を裏向きにし、ダウンジョグカードをそろえながらトップから3枚目の下にブレイクを作り、ブレイクからパスします。

トップから3枚のカードを表をちらっと見せて、テーブルの左の方に裏向きに置きます。4枚目を表向きにして「4枚目はリーダーのカードです」と言って、先のパイルの手前に置きます。つぎの3枚をちらっと見せてから裏向きに戻し、先のパイルの上ののせます。最後の3枚は表を見せずにそれらの上ののせます。残りの10枚のカードも同様にして、先の10枚の右側に置きます。4枚目をリーダーとして表向きに置くことも同様です。各パイルを取り上げ、表向きにして下の3枚を見せないように、上の6枚だけを広げて見せます。そして裏向きに戻してもとの位置に置きます。

リーダーカードの位置をゆっくり交換してから、両手を同時に使って、各パイルから3枚のカードを1枚ずつ表向きにしてリーダーカードの前方に置いていきます。ゆっくりパケット同士を入れ替えてから、まえと同様に上の3枚を表向きにしてリーダーカードの前方に表向きにのせます。

右の3枚を取って左手に持ちます。左の3枚を取って左手のカードの上に重ねます。つぎのようにして6枚をさりげなく混ぜるという動作を行います。上から2枚を押し出して右手に取ります。つぎに左手のボトムカードをプッシュして、右手のカードの上に取ります。つぎは左手のトップカードをプッシュして右手のカードの下に取ります。残りの2枚を右手のカードの上に取ります。

上から3枚を右のリーダーカードの手前に置きます。残りの3枚を左のリーダーカードの手前に置きます。ゆっくり2つのパイルを入れ替えてから、各パケットの3枚を同時に表向きにして、リーダーカードの前方のカードの上ののせます。

* 備考 *

トム・ボイヤーの方法と決定的な違いはありませんが、'フォローザリーダー'が歴史の中に登場したときの状況を伝えるために、両方を収録しました。両方を比較すると、バーノン版の方が有名であるにもかかわらず、ボイヤー版の方が洗練されていることがわかります。

フォーセット・ロスからウィーンのマジシャンの原案を教えられたバーノンとボイヤーが、別々にバリエーションを考えたにもかかわらず、トリックの骨子に大きな違いがないことから、ウィーンのマジシャンの原案もそれほど違いがないのではないかと、という感じがしてなりません。バーノンの改案で有名になった数多くのマジックの原案者が、バーノンという偉大な名前の陰に隠れてしまった、ということの顕著な例であると思います。

フォローザリーダー

＝トム・ボイヤー、雑誌“イビデム” 1956年6月＝

* 方法 *

このトリックに通常使われる赤 10 枚と黒 10 枚を重ね、表向きで広げて見せますが、閉じるときに表から 17 枚目の下にブレイクを作ります。ポケットを裏向きにすると、ハーマンパスによりトップの 3 枚をボトムにシフトします。

トップから 3 枚の表をちらっと見せて、テーブルの左の方に置きます。4 枚目を表向きにして「4 枚目はリーダーのカードです」と言って、先のパイルの下に置きます。つぎの 3 枚をちらっと見せて先のパイルにのせます。最後の 3 枚は表を見せずにそれらの上ののせます。残りの 10 枚のカードも同様にして、先の 10 枚の右側に置きます。4 枚目をリーダーとして表向きに置くことも同様です。各パイルを取り上げ、下の 3 枚を見せないように、上の 6 枚だけを広げて見せます。そして裏向きにしてもとの位置に戻します。

リーダーカードの位置をゆっくり交換してから、両手を同時に使って、各パイルから 3 枚のカードを 1 枚ずつ表向きにしてリーダーカードの上にのせていきます。ゆっくりポケット同士を入れ替えてから、まえと同様に上の 3 枚を表向きにしてリーダーカードの上に表向きにのせます。

右の 3 枚を取って左手に持ちます。左の 3 枚を取って左手のカードの上に重ねます。つぎのようにして 6 枚をさりげなく混ぜるという動作を行います。1 枚目を右手に取り、2 枚目は 1 枚目の上に取り。3 枚目と 4 枚目をいっしょに先の 2 枚の下に取ります。5 枚目は 4 枚の上に取ります。右手の 5 枚を左手の 1 枚の上ののせてそろえる。以上をもういちど繰り返します。

つぎにすばやく 6 枚を以下の順に左と右のパイルに分けます。1 枚目は左、2 枚目は右、3 枚目は左、4 枚目は右、5 枚目も右、そして 6 枚目は左。でたらめに置いた感じでやるのです。ゆっくりと 2 つのパイルを入れ替えてから、各ポケットの 3 枚を同時に表向きにして、リーダーカードの上にのせます。

* 備考 *

この方法をバーンの方法と比較してみれば、最後のフレーズにおけるカードのでたらめな扱い方が優れていることがわかるはずです。さらに、表向きにしたカードをリーダーカードの上にのせるということを取り入れたのも、このボイヤーの方法が初めてでした。

Part 2 年代順作品集

レストレスカラーズ

= F. ジャクソン、雑誌 "ジンクス" No.48、1938年9月 =

この方法はかなり早期に考案されたものにもかかわらず、ボイヤーやバーノンの系統とは異なる手法や見せ方が取り入れられています。'フォロワーリーダー'には、一本調子の運びという宿命的な短所がありますが、この方法ではその点に配慮が見られる点で、他のバリエーションとは一線を画していると思います。

* 方法 *

デッキを表向きにテーブルにスプレッドし、枚数のことを相手に言わずに、10枚の黒いカードを抜いて、裏向きに左手に持ちます。上から2枚目の黒カードの下に小指をさし込みます。

赤いカードを10枚抜いて黒カードの上ののせますが、そのとき右手の陰でブレイク上の2枚を右へ起こし、図1、赤いカードを8枚の黒カードの上ののせ、起こしている2枚の黒カードを赤カードの上にそろえます。この技法は、チャールス・ジョーダンの 'Bewitched Aces' で登場したものです。



残りのカードをわきに置きます。20枚の表を自分に向けて、まん中からカードを分け、2つのパケットを表向きにテーブルに隣り合わせに置きます。いま両方のパケットのバックの2枚はフェース側の色と異なるカードです。すべてが同じ色であるかのように見せるのに、スタンレイ・コリンズのフォーエースの手法を使います。

一方のパケットを裏を上にしてグライドの位置に持ちます。パケットのボトムから1枚目から6枚目までは、右手でふつうに抜いてテーブルに表向きに置き、つぎに7枚目をグライドして、8、9、10枚目を1枚のごとく返してテーブルのカードの上に置きます。そして最後の1枚をそれらの上に置きます。もうひとつのパイルでも同じことを行います。これで両方のパケットは、フェースから3枚目と4枚目が異なる色のカードとなっています。

両方のパケットから、フェースの1枚を取ってそれぞれパケットの前に表向きに置きます。そして両方のパケットをそれらの位置で裏向きにします。ここで、表向きに置いてあるカードの色が、残りのカードに影響を与えることを説明します。

まず2枚のリーダーカードを入れ替えます。そして一方のパケットを左手に持ち、グライドによりボトムから2枚目のカードを抜いて、リーダーカードの上に表向きに置きます。またリーダーカードを交換し、こんどはグライドをせずにボトムからカードを出して、表向きにリーダーカードの上に置きます。これをもういちど繰り返します。

最後はいっぺんにまとめてやると言って、強い念力をかけます。そして残っているカードをいっぺんに表向きにしてスプレッドします。

* 備 考 *

2枚目以降はグライドをしないので、カードを抜き出すまえに、ボトムカードを見せてから抜き出すとよいでしょう。

レストレスカラース

= オーヴィル・メイヤー、"マジックインモダンマナー"、1949年 =

ジャドソンのやり方を発展させたバリエーションだとメイヤーは述べています。原案におけるスタート時点のパケットの構成は、赤8枚に対して黒2枚ですが、メイヤーの方法では赤7枚に対して黒3枚となっています。この1枚だけの変化によって、交換できる回数が4回から6回と、2回増えていて、演技的に強力になっています。その改善点の代償として、原案では10枚を8枚にカウントして見せますが、こちらのやり方では7枚にしか見せられません。

私はジャドソンの原案とこちらを比べたとき、原案の方がすっきりしていてよいと思いました。最初に7枚見せたパケットが最後に10枚になっているのは、あまりに無理ではないかと感じました。しかし備考で説明するように、最初に10枚に見せる方法を思いついたため、それを取り入れたとしたら、こちらのバージョンも価値があると思い、収録することにいたしました。

* 方 法 *

黒いカードを何枚か使うと言って、観客に表を見せずに7枚の黒いカードと3枚の赤いカードをひとつのパイルに置きます。赤の3枚がトップです。赤のカードを何枚か使うと言って、反対の色の組合せのパイルを作ります。残りのカードはわきに捨てます。

赤のパイルを取り上げて、裏向きにグライドの位置に持ちます。「赤、赤、赤、...」と言いながら、ボトムから1枚ずつ引き抜いて表向きに置いていき、6枚目を取るときにグライドで赤いカードの陰に3枚の黒のカードを重ねて表向きにディールします。最後の赤の1枚をはじいて表向きにいちばん上に置きます。もう黒のパイルでも同様に行います。

各パケットのフェースから1枚取って、そのパケットの前に置き、パケットを裏返して表向きのリーダーカードの下に置きます。

リーダーの影響力について適当なセリフを述べたあと、赤と黒のリーダーを入れ替えます。それぞれのポケットを取ってグライドの位置に持ち、1枚目はグライドで抜き出して表向きにして、リーダーカードの上に重ねます。リーダーと同じ色のカードが出てきます。

リーダーを入れ替えます。各ポケットをグライドの位置に持ち、2枚目はグライドせずに正直にほどボトムカードを抜いて、表向きにしてリーダーカードの上に重ねます。

リーダーを入れ替えます。3枚目はグライドをせずにカードを出します。

リーダーを入れ替えます。4枚目はグライドしてカードを出します。

リーダーを入れ替えます。5枚目はグライドせずにカードを出します。

リーダーを入れ替えます。6枚目はグライドせずにカードを出します。

以上の操作で、つねにリーダーカードと同じ色のカードが出てきます。現在、リーダーと同色の3枚が各ポケットに残っています。

「いっぺんにリーダーに従わせることもできます」と言って、両方のポケットに魔法をかけます。赤のポケットを取って表向きに広げ、リーダーと同色であることを見せます。黒の3枚を取って赤の3枚の上で表を見せつつ、赤のポケットの一番上の1枚にクリンプをつけます。

「最後はカードを混ぜてみましょう」と言って、6枚をそろえて裏向きにします。そして適当なところから分けて上下を入れ替えて混ぜる方法で、いかにもランダムに混ぜている感じを出しますが、結果的にクリンプカードをトップに運びます。

「上から3枚置きますが、どちらのリーダーに置きましょうか」とたずね、相手の指定したリーダーの手前に3枚ディールします。残りの3枚を他のリーダーの手前にディールします。ディールされたパイルは赤、赤、黒のものと、黒、黒、赤のものですが、置かれた3枚のボトムカードの色とリーダーの色が同じ場合には、「まえと同じようにリーダー入れ替えたとしても」と言いながら、リーダーを入れ替えます。

反対の場合は入れ替えずに、「あなたが自由に置いたとしても」というセリフを言います。それからリーダーカードの手前のパイルのトップの1枚を表向きにしてリーダーの上ののせます。「リーダーに従います」と言います。

「もちろんこのカードも」と言って、つぎの1枚を表向きにしてリーダーの上に重ねます。「そして最後のカードですが」と言って、最後のカードを取ってリーダーの上で表向きにしようとして手を止めます。「こちらを入れ替えたとしても」と言って、手に持っているカードを入れ替えます。そして表向きにしてリーダーの上に重ねます。「リーダーに従います」と言って終わります。

* 備 考 *

メイヤーのやり方で10枚ずつ裏向きに2組抜き出したところから、つぎのようにやります。

トップに赤が3枚、その下に黒が7枚があるパケットを取り上げ、表向きにビドルポジションに持ちます。

1枚目を左手に引いて取り、2枚目を取ったときにその下にブレイクを作り、そのあと5枚目まではふつうに取り、6枚目を取るときにブレイク上のカードと右手のカードでハマンスイッチを行います。そして7枚目から10枚目までをふつうに取ります。

以上で10枚の黒いカードを見せたこととなります。赤いカードはフェースから7枚目～9枚目にきています。

なおそのカウント中につぎのタイミングでセリフを言います。1枚目を取るまえに「黒いカードが」と言ってから1枚目を取り、以下の取る動作に合わせて、「2枚、3枚、4枚、5枚、6枚、7枚、8枚、9枚、10枚あります」と言います。もちろん、10枚目を取ったときにこのセリフを終えます。

「この中からリーダーを抜き出します」と言って、表向きのまま広げ、5枚目のカードの左で分け、右手を前に運び、5枚目を表向きにテーブルに置きます。そして右手を戻してきて、左手のカードのバック側に入れてそろえます。裏向きにしてリーダーカードの手前に置きます。他方のパケットでも同様に行います。これでメイヤーバージョンと同じ状態になります。

私はもうひとつ、決定的とも思える改善点を見つけました。というよりもそれは、ジャドソンの原案でもこちらのバージョンでも、やりたくない点があったので、それを解決する方法として思いついたものです。それはそのつどパケットをテーブルに置き、また取り上げてグライドポジションに持ってハンドリングするということです。それを何回も繰り返すということが美しくないと思うのです。

そこでこのマジックは、2人で演じるという演出を思いつきました。2人のマジシャンがひとつずつパケットを持ち、ディールしたあとリーダーを交換したり、持っているパケットを交換して行えば、演技がスムーズに行えますし、2人で演じるということの面白さも表現できると思います。

このように今回は、'2人で演じるカードマジック'という概念を見つけることができました。古いカードマジックを研究しながら、新しい概念を見つけられたときほど、クリエイターにとって感激的な瞬間はありません。

トランスフォーメーション

= スチュワート・スミス、“ イットジャストハプド ”、1955 年 =

’ オイル&ウォーター ’ と ’ フォローザリーダー ’ の様式が融合したものとしてユニークな作品です。

* 方 法 *

デッキを表向きに広げて、赤いカードを 6 枚抜き出して表向きにテーブルに置きます。このとき、フェースから 1 枚目と 3 枚目は似ているカードとします。黒いカード 6 枚を抜き出して、表向きに赤いカードの上に重ねます。

テーブルの 12 枚を取り上げて、広げて見せます。それらを閉じるとき、フェースから 8 枚目の下にブレークを作り、8 枚を右手で取り、左手の 4 枚を裏返し、その上に右手の 8 枚を裏返して重ねます。赤いカードの上に黒いカードを重ねたように見せるのです。

トップの 6 枚を順が変わらないように右手に取り、ちらっと表を見せてからテーブルに置きます。残りの 6 枚を順が変わるように数えてから左手に戻します。テーブルの 6 枚を相手に持たせます。

あなたと相手が交互にカードを並べます。カードが置かれるたびに「赤、黒、赤、黒、赤、黒」と言います。そして左端と右端のカードを表向きにします。さらにその 6 枚の下に、残りのカードをまえと同じように交互に並べます。そして左端と右端のカードを表向きにします。図 1 の状態となります。



「表向きのカードを見ると、カードの配列が赤黒交互になっているのがわかります」と言ってから、右上の表向きのカードと左下の表向きのカードを交換します。「この 2 枚を交換すると、カードの配列が影響を受けます」と言って、すべてのカードを表向きにします。

フォローザリーダー

= ラリー・ジェニングス、“ レクチャーノートオンカード&コインハンドリング ”、1967 年 =

ラリー・ジェニングスのこのバージョンは、現象的にはオーソドックスないまままでのバージョンと大きく違いはありませんが、手法的に知っておいた方がよい部分があるので収録いたしました。

* 方 法 *

赤いカードを 6 枚抜き出して表向きにテーブルに置きます。その上に 6 枚の黒いカードを表向きにのせます。残りのデッキは使いません。

12 枚を取り上げ、6 枚の黒いカードを広げて「6 枚の黒いカードと」と言います。「6 枚の赤いカードを使います」とセリフを続けつつ、赤いカードを広げますが、右端の赤いカードが左端の黒いカードの下に完全に隠れるようにします。黒いカードと赤いカードを左右の手に分けて持ちますが、右手は黒いカードの下に 1 枚の赤いカードをスチールしています。右手の黒いカードを赤いカードの下に入れてそろえます。

カード全体を裏向きにして、順番が変わらないように上の 6 枚を取ってテーブルに置きます。残りの 6 枚をその左に距離をおいて置きます。左のポケットを少し広げ、相手にリーダーカードを選ばせませんが、いちばん右の黒いカードが選ばれないようにします。そのカードを表向きに前に置きます。残りのカードそろえて表向きにして、リーダーカードを指さして「これは赤いカードのリーダーです」と言います。5 枚のカードを裏向きにしてリーダーの手前に置きます。もうひとつのポケットでもまったく同様に行います。

リーダーを入れ替えて、両方の裏向きのポケットのトップカードを表向きにしてリーダーの上ののせます。こんどは裏向きのポケットを入れ替えて、上のカードを表向きにしてリーダーの上ののせます。つぎは裏向きのトップから 1 枚ずつ取ってリーダーの上ののせ、そしてリーダーを入れ替えます。そして裏向きのカードを表向きにしてのせます。

つぎはふつうにリーダーを入れ替えて、裏向きのカードを表向きにしてのせます。最後は、左上のリーダーポケットと右下の裏向きのカードを入れ替え、右上のリーダーポケットと左下のカードを入れ替えます。そして裏向きのカードを表向きにしてリーダーの上ののせます。

* 備 考 *

バーノンやボイヤー作品では、どちらもパスによってカードのディスプレイメント（密かなる移動）を行っています。パスを使わないで同等の目的をはたしている点で、この作品を収録いたしました。

ただし赤いカード 1 枚を黒いカードの下に隠すことによって、カードのすり替えを行う方法は、ジェニングスが考えたものではありません。この方法はすでに 1948 年に発行されたジョージ・キャプラン著「ファインアートオブマジック」中の、「レッスンインミスディレクション」というトリックの中で、キャプランの考案したものとして書かれています。

キャプランの作品では、赤いカードと黒いカードを 10 枚ずつ使い、黒いカードの下に 3 枚のカードを隠すことによって、3 枚のカードのすり替えを行っています。

したがって前述のシュワート・スミス作品も、キャプランのアイデアを利用していることになります。わかっている範囲では、そのようなディスプレイメントの手法は、キャプランが原点であるようです。

セブンペアのフォロワーリーダー

= ニック・トロスト、雑誌“ニュートップス”、1969年12月 =

* 方法 *

表を自分に向けて広げていき、「7組のペアを使います」と言って、まずくっついている2枚の赤いカードを抜き出して裏向きにテーブルに置き、つぎはくっついている2枚の黒いカード、2枚の赤、2枚の黒、2枚の赤、2枚の黒、2枚の赤、1枚の黒を抜き出して重ねていきます。残りのカードは使いません。テーブルに置いたカードは上から、B、R、R、B、B、R、R、B、B、R、R、B、B、R、Rとなっています。

パケットを左手に取り上げて、「これらのペアは赤と黒のカードです」と言って、トップの2枚を右手にファン状に広げて取り、表を見せてから裏向きにテーブルに置きます。これをあと5組のペアで行い、ひとつの山に裏向きに重ねていきます。残りの3枚は上の1枚をプッシュオフしてファン状にし、(下の2枚は重なっている)、表を見せてから、テーブル上の山に裏向きにのせます。

パケットを取り上げ、トップから1枚目と2枚目を表向きにし、「最初のペアを分けます」と言って、赤を左、黒を右に表向きに置きます。「これらのカードは赤組と黒組のリーダーカードです」と言います。

「赤のリーダーの下に赤と黒のカードを置きます」と言て、トップから2枚取って赤のリーダーの手前に置き、つぎのペアを黒のリーダーの手前に置きます。図1。これを3枚のカードが残るまで行い、最後の3枚は黒と赤のカードであるのを見せてから、黒のリーダーの下に置きます。



「どちらも赤と黒が混ざっていますが、しばらくするとリーダーの影響が現れます」と言ってから、右の山のトップカードを取り、そのカードをボトムにさし入れてそのパケットを表向きにひっくり返しつつ、そのカードをそのパケットのフェースに加えます。上から1枚ずつ黒のリーダーの上にオーバーラップさせて置いていきます。4枚置いたら、つぎはバックルもしくはプッシュオフして2枚を置きます。そして最後の1枚を置きます。すべてのカードが黒になりました。

左のパケットを取り上げて、赤のリーダーの上に1枚ずつ表向きに置いていき、すべて赤いカードになったのを見せます。

リーダーの影響

= 加藤英夫、2006年5月16日 =

ニック・トロストの 'セブンペアのフォロワーリーダー' のエクストラカード不要のバリエーションです。

* 方法 *

表を自分に向けてファンに広げます。「赤と黒のペアを抜き出していきます」と言って、赤と黒のカードをいっしょに抜き出しますが、最初は赤の方がフェース側にあるのを抜いたとします。それらの表をちらっと見せてから、裏向きにしてテーブルに置きます。そのとき、赤の方が左にあるように広げた状態でちらっと見せるようにします。

2組目に抜き出すペアは、黒の方がフェース側にある2枚です。広げたときに赤が左にあるようにしてちらっと見せれば、最初に見せたペアと赤と黒の位置関係が違っているのが目立ちません。このペアを裏向きにテーブルのペアの上に重ねます。

3組目は1回目と同様、フェースに赤がある2枚を最初と同様の広げ方でちらっと見せてから、裏向きにテーブルのカードの上に重ねます。

4組目は2回目と同様、フェースに黒がある2枚を同様に見せてからテーブルのカードの上に重ねます。

そして5組目に、いままでの法則と逆にします。すなわち4組目と同じように、フェースに黒のある2枚を出します。

そして6組目はフェースに赤のある2枚、7組目はフェースに黒のある2枚を抜き出します。

「赤と黒をペアで出しましたから、どの2枚を取っても赤と黒です」と言いながら、トップの2枚を広げて取りちらっと表を見せます。その2枚の下にあと3枚取り、それら5枚をボトムにまわします。

トップの2枚を表向きにします。赤と黒です。黒をテーブルの左に表向きに置き、赤を表向きに右に置きます。「この2枚はリーダーです」と言います。

「赤と黒をリーダーの上に置きます」と言って、トップから2枚取り、黒のリーダーの上にずらして置きます。つぎの2枚を赤のリーダーの上にずらしておきます。残りのカードを2枚ずつ交互にリーダーの上に置いていきます。図1の状態になりました。



リーダーの影響を受けたと説明して、リーダーカードの裏向きのカードを表向きにします。

* 備考 *

赤いカードを左に広げるとするのは、図 2 や図 3 のように広げるということです。



フォローザリーダーアップデイトッド

= ジェラルド・ドイチュ & ピーター・マーシャル、雑誌 "アポカリプス"、1986 年 2 月 =

セリフについては原文にもほとんど書いてありません。標準的な 'フォローザリーダー' と同じような話でよいと著者は述べています。

* 方法 *

表を上にしてデッキを広げ、8 枚の黒いカードを抜き出します。さらに 8 枚の赤いカードを抜き出して黒いカードの上に乗せます。4 枚のカードを密かにボトムからトップに移すのですが、クラシカルなバージョンではパスを使いますが、このバージョンではジョージ・キャプランの手口を使います。

16 枚のカードを表向きに両手の間に広げ、下から 4 枚目の上にブレイクを作りながらカードを閉じます。そしていかにも上の 8 枚を取る感じでブレイク上の 12 枚を右手で取り上げますが、指先でパケットの厚さがわかりにくいような持ち方をします。左手はパケットの薄さがわかりにくいように、高い位置に持ちます。

観客の方を見て、「8 枚の赤いカードと 8 枚の黒いカードで、とても不思議なことをお見せします」というようなセリフを言います。左手のパケットを右手のパケットの上に重ね、全体を裏返します。(訳注：パケットを重ねるとき、どちらを上にしたかはっきりわからないようなやり方をする必要がありますが、原文には指摘されていません)。

トップカードを取って黒いカードであることを見せ、裏向きにテーブルに置きます。置いたときに「1 枚」と数えて、そのあとその上に数えながら 8 枚までディーリングします。それらの表は見せません。つぎのカードが赤いカードであるのを見せ、それを最初の山の右に置いて、その上に 8 枚目ま

でディールします。数えながら置きます。

左のポケットを取り上げ、表向きにして上の2枚を押し出して右手に広げて取り、3枚目の黒いカードを押し出してテーブルに表向きに置き、「黒のリーダーカードを置きます」と言います。右手の2枚をポケットの上に戻し、7枚のポケットを表向きにリーダーカードの手前に置きます。

右の赤ポケットについても同様に行います。

表向きのそれぞれのリーダーカードの手前に裏返します。

リーダーカードを交換します。

左右の手で同時に左右のポケットのトップカードを取り、表向きに返してそれぞれのリーダーカードの上に置きます。それなりのセリフを言います。あと3枚のカードをそれぞれのポケットから表向きに返して、前の表向きのカードの上に置きます。

4枚ずつになった表向きのリーダーポケット同士を交換します。

左の裏向きのポケットを取り、表向きにしてジョーダンカウントを行い、全部黒いカードのように見せます。

そのポケットを裏返してもとの位置に置き、トップカードを表向きにしてリーダーポケットの上に置きます。

同じことを右のポケットで行います。

また表向きのリーダーポケットを交換します。そしてそれぞれの裏向きのポケットのトップカードを表向きに返してリーダーポケットの置きます。

リーダーポケットを好感します。そしてそれぞれの裏向きのポケットのトップカードを表向きに返してリーダーポケットの上に置きます。

いまそれぞれのリーダーポケットの手前には、裏向きのカードが1枚ずつ残っています。それらを左右の手で取り、その2枚をいかにもクロスさせて交換したように見せて、“Card Magic Magazine”第6号に解説されている、ダレイズディライトを行って、それぞれリーダーポケットの上ののせます。すなわち、いかにも2枚を交換したかのように見せて、もとの位置に置くのです。

それからそれぞれの裏向きのカードを表向きにして、やはりリーダーに従ったことを見せます。

ボトムビドルフォローイングオーダーズ

=ピーター・ダフィ&ロビン・ロバートソン、“カードコンスピラシー第2巻”、2003年=

このトリックの原案は、“ディスカバリー #1”に解説された、カール・ファルブズの‘フォローイングオーダーズ’であり、ダフィとロバートソンは、カードのすり替え部分を自分たちのやり方にさし替えたようです。

* 方法 *

スペードとハートのAから5までを抜き出し、表向きに重ねたとき、下から上に向かって、5S、3S、AS、4S、2S、AH、3H、5H、2H、4Hとします。他のカードは使いません。10枚をさっと広げて表を見せて、すぐに閉じます。

10枚を裏向きに持ち、「5枚をこちらに置きます」と言って、1枚目はノーマルディーリング、2枚目はボトムディーリング、3枚目はノーマルディーリング、4枚目はボトムディーリング、5枚目はノーマルディーリングします。

残りの5枚を裏向きにビドルポジションに持ち、つぎのようにカウントします。1枚目としてトップとボトムから同時に抜いて左手に取ります。2枚目を普通にとって、その下にブレイクを作ります。3枚目を普通に取ります。残りの1枚を4枚目として取りつつ、ブレイクの上の2枚を右手にスチールし、その2枚を5枚目として左手のカードの上に置きます。

その5枚をテーブル上のパイルの隣に置きます。

両方のパイルのトップカードを表向きにして、それぞれのパイルの前に置きます。それらはAです。赤と黒のAの位置を入れ替えて、リーダーを入れ替えると他のカードはリーダーに従うという、フォローザリーダーの説明を行います。そして両方のパイルのつぎのトップカードを表向きにして、表向きのリーダーカードの上に置きます。リーダーの色にマッチした2が現れます。

つぎは裏向きのパイルを入れ替えます。そしてトップカードを表向きにして表向きのカードの上に置きます。

以下同様にして、表向きのカードを入れ替えたり、裏向きのカードを入れ替えてから、両方のトップカードを表向きにして、表向きのカードの上に置きます。Aから5まで順番に、しかもリーダーと同じ色で現れます。

* 備考 *

というものですが、色と順番がリーダーに従うという現象は、私は初めてこの本で読みました。

発想としてはたいへん面白いですね。ところが上記のやり方には2つの修正したいポイントがあります。

第一に、最初の5枚のカウントの方法と、あとの5枚のカウントの方法が違うことです。私はどんなトリックにおいても、そのようなコンシステンシーのないハンドリングを避けたいと考えます。何故なら、そのことだけで何か怪しいことをやっているように見えるからです。

最初の5枚のボトムディールとノーマルディールが通用するのだとしたら、あとの5枚をそのままボトムディールでスタートしてつぎにノーマルディールと交互に行えば、目的の順番になるのです。わざわざビドルポジションでトップとボトムを取るような至難な技を駆使する必要はありません。

そしてプレゼンテーション的に上記のやり方の致命傷であると思うのは、最初に10枚を広げて見せるときに、“さっと見せて”と説明されている点です。なぜこの部分を曖昧にするのでしょうか。私にはその理由が理解できません。その部分を私ならつぎのように行います。

まずデッキを表向きに広げて、出てきた順にスペードの山とハートの山に置いていきます。そして残りのカードをわきに置き、「スペードとハートを違う順番にします」と言って、両パケットを上記の説明の通りの順番にして、はっきり違う順番にしたのを見せます。それからスペードの5枚をハートの5枚の上に重ねます。これで上記のやり方の状態になりましたので、上記のように続けます。

そして現象を見せる段になったら、「赤と黒の組のリーダーはどちらもAです」と言って、両方のパイルのトップを表向きにします。そしてリーダーを入れ替えます。「たとえリーダーを入れ替えても、同じ色のカードが順番に現れます」と言って、両方の2を表向きにします。以下前述のように続けます。

以上のプレゼンテーションによって、順番がでたらめであったにもかかわらず、順番に、しかも色が適合して出現するという現象が明確に表現できます。

フォロワーリーダークライマックス

= 加藤英夫、2012年6月14日 =

私がかねがね、'フォロワーリーダー'にはクライマックスがない、と思いつけてきました。ですからたとえばの話ですが、テレビ番組で何かを演じようとしたとき、'フォロワーリーダー'を演じようとは思いません。

とそのように大勢に見せることを想像したとき、このアイデアが浮かびました。演じるのは今まで解説してきたどのバージョンでもかまいません。それらを演じたあと、つぎのように続けるのです。

デッキの残りのカードを取り上げて、「リーダーが本当に強い力を持っていることをお見せするために、残りのカードを全部使います」と言います。そして表向きに広げて赤と黒がよく混ざっていることを見せます。

カードをそろえて2組に分けます。そしてそれぞれ赤と黒のリーダーの手前に置きます。リーダーカードを左右の手に取り、左右のポケットに魔法をかけます。そして左右のポケットを表向きにリボンブレードします。赤と黒に分かれています。

もちろん、ストリッパーデッキを使います。私はマジックを自分の満足のためではなく、人々を楽しませるエンタテインメントとするためには、いくらでも仕掛を使います。

ストリッパーリーダー

= ケン・クレンツェル、"ケン・クレンツェルズインジュニユイティ"、1997年 =

私は前述の'フォロワーリーダークライマックス'を書いたところで、'フォロワーリーダー'に関する記録済のデータを使いつくしました。たった16ページでは物足りませんでした。最後を飾る強力な作品はないかと、まだ読んでないものを探すことにいたしました。

するといきなりすごい作品に出会いました。ストリッパーデッキを使う作品です。ですから、ストリッパーデッキを'フォロワーリーダー'に使うという発想は、私のアイデアとは言えなくなりました。ですから前述の作品を削除しようかとも思いました。しかしそうしませんでした。その理由については、クレンツェル作品を解説したあとにお話しいたします。原著から正確に翻訳して収録いたします。

この作品はこれ単独で演じることもできますし、通常のフォロワーリーダーを演じたあと、クライマックスとして演ずることもできます。ストリッパーデッキを使って、同じポケットをすべて赤いカードに見せたり、すべて黒いカードに見せる手法は、雑誌"スフィンクス"1907年11月号に、エルスワース・ライマンが書いています。

* 現象 *

シャフルしたデッキを広げて赤と黒がよく混ざっているのを見せてから、マジシャンはデッキを2組に分けます。それから1枚の赤いカードを一方のポケットの前に置き、1枚の黒いカードを他方のポケットの前に置きます。それら2枚は赤と黒のリーダーカードであり、魔法をかけると赤のリーダーの方のポケットがすべて赤いカードになり、黒のリーダーの方のポケットがすべて黒いカードになります。

赤のリーダーカードを黒のポケットに置き、黒のリーダーカードを赤のパイルに置きます。そして魔法をかけると、それぞれのパイルはリーダーカードと同じ色になってしまいます。

2組を重ね、デッキから不思議な力を抜き取る仕草をして、デッキをシャフルする真似をします。そしてデッキを表向きに広げると、何と赤いカードと黒いカードが完全に混ざっているのです。

* 準備 *

ストリッパーデッキを使用します。ライマンのトリックでは、赤いカードの右上と左下のがコーナーショナーで、黒いカードの左上と右下がコーナーショートになっています。赤と黒を交互にセットすると、どのコーナーをリフルするかによって、全部赤に見せたり、黒に見せたりすることができます。クレンツェルはこの機能を'フォロワーリーダー'に取り入れたのです。

クレンツェルは通常のストリッパーデッキを使います。赤と黒を方向違いにして交互にセットします。このうちの何枚かを使って、クラシカルな'フォロワーリーダー'を演じますが、工夫すれば赤と黒の方向を保つことは難しくありません。どうしても一部が変化してしまうなら、終わってからさり気なく直してからデッキに戻します。

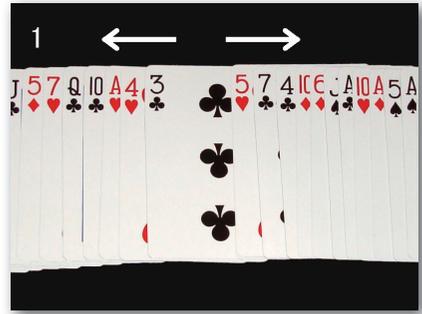
* 方法 *

すべてが赤黒交互になったデッキを横向きにテーブルに置きます。右手で手前右コーナーで持ち上げて、だいたい半分をカットして、カットを完了します。このカットは、しゃべりながらリラックスした感じでやってください。

もういちど同じ手前右コーナーでカットしますが、こんどはカットした上半分を右に置いてリフルシャフルの体勢にします。2度同じコーナーでカットしましたから、どちらのポケットもトップカードは、何色かはわからなくても同じ色になっています。

リフルシャフルします。(訳注：原著者は指摘していませんが、どちらも内側のコーナーでリフルするようです)。ペアでカードが落ちていくため、赤黒の交互端持たれなくても、同じ色が2枚より多く連続することはありません。

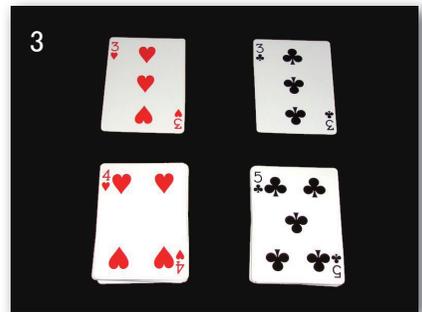
デッキを表向きにリボンスプレッドして、よく混ぜていることを見せます。そして中央あたりで分けますが、フェースに違う色のカードが出るように分けます。たとえば右端が赤であるとしたら、赤、黒、赤の順になっている部分の、黒の右で分けます。図1。



それぞれのカードをそろえて左右に置きますが、どちらの色の幅の広い方がどちらを向いているかを知っている必要があります。カードをそろえるとき、図2のように左上サイドを押し下げてやればわかります。



それぞれのパイルからいちばん上のカードを取り、反対のパイルの前に置きます。そうすると、置いたカードと手前のパイルのいちばん上のカードが同色となります。図3。



前に置いたカードがリーダーの働きをすることで、それぞれの組に魔法をかけます。一方のパイルを取り上げ、上もしくは下のサイドを右手の親指と中指でつかみ、リフルして左手の上に落とし、すべてリーダーカードと同じ色であるのを見せます。上と下どちらを持つかは、幅の広い方がどちらを向いているかによります。カードをそろえてもとの位置に戻します。

他方のパイルを取り上げ、まえのパイルとは反対のエンドでサイドをつかみ、左手の上にリフルして落とします。すべてリーダーカードと同じ色に見えます。カードをそろえてもとの位置に置きます。

それぞれのリーダーカードを左右の手に取り、それぞれを反対のパイルのフェースに置き、魔法をかけます。そしてそれぞれのパイルがリーダーに合わせて色が変わったのを見せます。

リーダーカードをパイルの上に置かず、前に置いたまま入れ替えるやり方もできます。その場合には、それぞれのパイルをビジュアル的な手法でフェースカードを他の色に変化させるのです。

2つのパイルを重ねて、デッキを裏向きにします。デッキから不思議なパワーを抜き取ってしまうと

言って、それなりの演技をします。つぎに見えない力でカードを混ぜると言って、リフルシャフルする真似をします。そしてデッキを表向きにリボンスプレッドして、赤と黒がもと通り混ざっていることを見せます。

* 備 考 *

読者の中には、「ストリッパーデッキという誰にでも知られているような、古くさいトリックデッキをプロフェッショナルな演技の中で使うなんて」と考える方もいるかもしれません。ところが現実はその考えを吹き飛ばします。

ストリッパーデッキはサトルティと構成の仕方によって、その存在を知っている人々に対してさえ、強力な効果を生み出します。しかもストリッパーデッキでたいていのノーマルデッキ用のトリックを演ずることができます。ですからそのようなトリックを演じているときに、うまいタイミングでストリッパーデッキを使って演技を行えば、一般の人々のみならずマジシャンたちも驚嘆させることができます。

ここに紹介した作品が、ストリッパーデッキとクラシカルなマジックが見事に融合した好例であり、ストリッパーデッキを使うことの意義を証明していると確信いたします。

上記の備考は原著者が書いたものですが、私がストリッパーデッキに対して主張したいことを代弁してくれているかのようです。“Card Magic Library”第10巻に、これに近いことを書きましたが、このように具体的な例のあとに書かれると、たいへん説得力があるのではないかと思います。

私が‘フォローザリーダークライマックス’を削除しなかった理由は、スタンダードな‘フォローザリーダー’を演じたあとにクライマックスとして演ずるには、必ずしもクレンツェル作品が適しているとは思えないからです。

すなわちクレンツェル作品は、スタンドアロンの演目として十分に成立しているのです。そのようなものをクラシカルな‘フォローザリーダー’のあとに連鎖させると、まえに演じた効果が低減するどころか、印象にさえ残らなくなる可能性があります。

落語に‘枕’というのがあります。それをインターネットで調べると、つぎのような回答が出てきました。

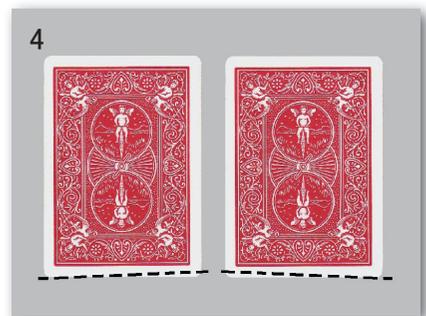
落語はマクラと本編、そしてオチで構成されています。この3つを、それぞれ独立させることなく、一連の流れで話します。

この説明の中から、‘オチ’という部分がマジックにおけるクライマックスに該当する部分だと

思います。落語のオチで長く説明のいるものは聞いたことがありません。それまでの展開の決着をビシッと決めるには、なるべくビジュアルで短期決戦型の現象が適しているのです。もちろん、上記の落語の話にあるように、“それぞれを独立させることなく”ということもたいへん重要です。いくらそれ単独で強力な現象でも、主題で演じた現象と無関係では、何でもかんでも花吹雪を散らして終わるマジックと同じです。そんなことをやってはいけません。

最後に、クレンツェル作品で変えた方がよくなると思われる点を付記しておきます。それは通常のストリッパーデッキよりも、エンドをストリッパーにしたタイプの方がよいということです。しかも、前のエンドは手を加えず、手前のエンドだけ加工すれば、前からは加工部分がまったく見えません。

図4のようなカットの仕方をするということです。



そのようなデッキでは、図5のようにリフルして落としやすく、左をリフルするのと右をリフルする差があまり目立ちません。テーブルからパイルを取り上げて、リフルしてからまた置くという流れにおいても、エンドを持ってリフルする方がよいことは明白です。



さて、'フォローザリーダー'のクライマックスに使えるのは、ストリッパーデッキだけでしょうか。ダブルフェイス、ダブルエンダー、ラフ&スムーズなどなど、まだ可能性は残されています。

ひとつの現象を幅広く追求したとしても、たんに多くのやり方を知るだけではあまり意味がありません。それらから得られたことによって、現象の魅力の幅を広げることに結びつけたいものです。

今回は、'フォローザリーダー'に対するクライマックスの考察で締めくくることになりましたが、落語における'枕'の部分に'フォローザリーダー'を生かすことはできないか、という逆の概念もあることに気づきました。あまり多くない枚数で簡潔に'フォローザリーダー'を演じたあと、'アウトオブジスワールド'という本題につなげるというのはどうでしょうか。悪くなさそうです。まだまだ考えることは残っています。いかに面白いトリックを演ずるかではなく、いかに面白いショーを演ずるか、という観点で考えるべき時代であると私は思います。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第7号

発行 2012年11月4日

著者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

